

『大審問官スターリン』

亀山郁夫著

小学館 二〇〇五年

スターリンとは何者だったのか。スターリンをめぐる直接・間接の膨大な歴史的史料、同時代人の証言、さらには客観的事実としての歴史的事象は、スターリンが何を行ったかを示すことはできるとしても、スターリンがどのように考え、何がそのような行動に向かわせたかを語ることはできない。無論、このことはスターリンに限らず、誰に対しても当てはまることだろうが、とりわけ絶大な権力が集中し、密告のネットワークの中枢に座すスターリンについては、外面に現れる言葉や行為は、少なくとも直接的には、それらを生み出す思考や感情を示すものとはならない。「スターリン主義の謎を解く鍵は無数の密告状にあるということ。彼が密告を通して脳裏に作り上げた現実、歴史家がどのようにして明らかにしようと試みても不可能な狂気の世界であり、われわれが歴史書を通して知るスターリン時代とそれとはまったく別次元の世界なのだということ」という亀山氏の確信は、歴史家が手にする個々の具体的事象をこの書物の中で綿密に提示しつつも、全編を通じてこの著作を支える基本的なスタンスとなっている。それはつまり、歴史的

事象の裏面で暗躍した密告状を単に史料的に分析するというのではなく、歴史的現実という外側の世界に對置されるある内側の世界を描き出すという、客観的にいえばほとんど不可能な試みにむけた宣言ということにもなるだろう。しかしこのことが、本書の大きな特徴をなし、また大きな魅力を与えるものとなっている。

本書は、『甦るフレイブニコフ』、『破滅のマヤコフスキー』、『磔のロシア』、『熱狂とユーフォリア』といった一連の著作、つまり、亀山氏がこれまで特に精力を注いだきたロシア・アヴァンギャルドの詩人・芸術家の営為を明らかにし、とりわけ政治権力と芸術との関係に焦点を当てる研究の主題圏のうちに位置づけられるものである。しかし、亀山氏は本書で、いわばアカデミックなお約束事から離れて、スターリンをはじめとする登場人物たちの主観の圏内に入り込んでゆく。亀山氏はエピソードの中で、この著作がとる二つの「逸脱」について触れているのだが、その一つ目として述べられているカラーージュ的手法については、必ずしも逸脱とはいえないだろう。基本的にはクロノロジカルな章構成によりながらも、「事実」の断片をモザイク的に配置する叙述のあり方は、この著作のもう一つの重要な特徴であるが、歴史を物語るといふ語りのあり方に對置されるこの表現の形式は、内側の「別次元の世界」を描き出すために要請されているといつてよいかもしれない。もう一つの「逸脱」としてあげられているのが、まさにこの主観的記述に関わる、「スターリンによる一人称モノローグの導入」である。亀山氏は、著書のなかでこれを用いた三つの箇所を挙げているのだが、しかし、これらのもっとも顕著な例に限らず、本書は

さまざまな登場人物の主観をしばしば内的な遠近法によって描き出している。「ドキュメンタリー」という名称を与えられて成立しているジャンルに一般的に許容されている（あるいは、しばしばこのジャンルの特徴となっている）こういった語りのあり方によって、読者はそこに「逸脱」を認めるというよりも、おそらくごく自然に「ドキュメンタリー」としてこの著作を読み進めていくことになるだろう。

例えば、大成功を収めたシヨスタコーヴィチのオペラ『ムツェンスク郡のマクベス夫人』が、初演から二年経って突然『プラウダ』で激しい批判にさらされた事の次第を明らかにしてゆくくだりでも、著者は外的な事象に依拠した説明の仕方に満足しない。「スターリン自身に限りなく寄り添い、その内面に錨を落としていく」という著者のアプローチは、この言葉が明示的に述べられている、『マクベス夫人』をめぐる有名な事件についてだけでなく、亀山氏の著作全体を通じて強く感じ取ることができるものである。この言葉だけを表面的に受け取ったとすれば、単に主観的な感情移入を行っているともとられかねない。しかし、読者がそれをはるかに超えてテクストの力を感じとるとすれば、それは、人物に限りなく寄り添いその内面に錨を落とすようにして書かれたこのテクストが、ちょうど文学テクストのうちに分け入り、生起したばかりで湿気を含んだ言葉のそばの土を踏みしめ、この言葉にそつと触れるように沈潜していく経験を、ここでのさまざまな事象たちについても同じように共有しているからであろう。

全体は五つの章からなる。それぞれ「奇跡」、「暗雲」、「神秘」、「聖戦」、「権威」と題された各章の標題のうち、「奇跡」、「神秘」、

「権威」は『カラマーゾフの兄弟』のなかで大審問官が語る地上の三つの力にちなんで用いられている。しかし、こういったアレゴリーの標題を提示しつつも、それぞれの章は、クロノロジカルに構成されている。レーニン死去から第一次五カ年計画採択までを扱う第一章（一九二四—一九二九）、マヤコフスキーの自殺に象徴されるような作家や芸術家への圧力強化、そして大粛清の引き金となるキーロフ暗殺までを扱う第二章（一九二九—一九三四）、ゴリキー毒殺とブハーリンの逮捕・銃殺という二つの頂点とともに、シヨスタコーヴィチ批判、メイエルホリドの処刑、スターリン礼賛により「汚点」を残したブルガーコフとプロコフィエフ、こういった大テロルの時代が語られる第三章（一九三五—一九四〇）、第二次世界大戦中の「反ファシズム」的ナショナリズムの実態に光を当てた第四章（一九三九—一九四五）、ジダーノフ批判の開始からスターリンの死までの最後の時期を扱う第五章（一九四六—一九五三）と見てゆくと、確かにそこでは大きな歴史の流れが語られていることになる。しかし、実際に読み進めていく過程においては、各章の冒頭に配されたコラム的な記事なども含め、むしろ断片を構成していくことによって、スターリン時代の作家や芸術家の営みとスターリンの思惑との交錯がいわばモザイク的に描き出されるといった印象をもつことになるだろう。

そのようにして本書は、スターリン時代のソヴィエトの政治的・文化的状況に疎い読者をも惹きつける一大パノラマを提示しているのだが、この著作にはもう一つ別の、読者を惹きつける仕掛けがある。それは、「プロローグ」で謎のように示されるスターリンの「傷」である。これによって、本書全体があた

かも一つのミステリーであるかのように構成されてゆく。この「傷」と呼ばれているものは、スターリンというミステリーを解き明かそうとする本書の一つの軸であるが、ここでミステリーのネタをばらすようなことはやめておこう。これを軸にして本書が構成されていたのであろうと思つて読み進めていたのだが、エピソードを読むと、この軸は、実は執筆の最後の段階になつて導入されたものだということ、その魅力的な構成になおさら感心してしまった。

(山口裕之)